

令和5年2月28日

嬉野市議会
議長 辻 浩一 様

産業建設常任委員会
委員長 川内 聖二

産業建設常任委員会報告書

令和4年第4回嬉野市議会定例会において付託された下記事件の調査結果を、嬉野市議会会議規則第107条の規定により報告する。

付託事件名 「観光まちづくりについて」

【調査理由】

令和4年9月23日に九州新幹線西九州ルートが一部開業したことに伴い、本市においても念願の嬉野温泉駅が開業した。今後、これまで無かった鉄路を活用し、観光産業振興の発展につなげるため、令和6年3月に新幹線駅が開業する敦賀市の今後の取り組みについて調査研究を行った。

【調査概要】

令和4年9月に敦賀駅前で供用が開始された敦賀市知育・啓発施設「ちえなみき」にて、「新幹線開業を見据えた観光まちづくりについて」の説明及び現在、展開されている施策に関し説明を受けた。

【調査日】 令和5年1月24日(火) 14時30分～16時30分

【調査場所】 敦賀市知育・啓発施設「ちえなみき」 福井県敦賀市鉄輪町

【対応者】	敦賀市議会	副議長	浅野 好一 氏
	敦賀市新幹線誘客課	係長	原田 芳広 氏
	敦賀市議会事務局	主査	丸谷 祐二 氏

◇ 敦賀市の概要

敦賀市は、昭和 12 年に市政がスタートし人口が約 6 万 2 千 8 百人で、港と鉄道で栄えてきた。敦賀港は水深が深く、波が穏やかな天然の良港で古くから北前船としての歴史があり、昭和に入り国際貿易港としてロシア等とつながってきた。

現在、フェリー船が北海道の苫小牧市と航路を開いて行き来し、また、近年は博多や韓国の釜山との定期航路ができており、今後は、クルーズ船の寄港も推進していく予定である。

また、敦賀市というと原子力のイメージがあり、日本原子力発電株式会社敦賀原子力発電所の 1 号機及び 2 号機並びに日本原子力研究開発機構の「新型転換炉原型炉ふげん」及び「高速増殖原型炉もんじゅ」の研究をしていたが、「ふげん」及び「もんじゅ」に関しては廃炉事業に入り、敦賀発電所 1 号機も廃炉の工程に入っている。敦賀発電所 2 号機は、令和 4 年 10 月に再稼働に向けた審査の再開に入ったところである。

鉄道に関しては、明治 15 年に日本海側で初めて鉄道が開通した町であり、明治 45 年には、東京新橋から敦賀を経てヨーロッパへ行く欧亜国際連絡列車が開業し、敦賀市を拠点にユーラシア大陸へ往来していた。北陸新幹線は、当初計画より 1 年遅れての令和 6 年 3 月に開業となるが、開業に向けて現在、ソフト事業・ハード事業、まちづくりの受け皿づくりを計画し着実に進んでいるところで、令和 4 年 9 月に「ちえなみき」を含め施設ができ上がった。

◇ 新幹線開業を見据えた観光まちづくりについて

新幹線開業を見据えたハード事業として、平成 29 年に国土交通省が創設した、全国で 10 地区のモデル地区に選定されると事業費の 2 分の 1 補助が受けられる「景観まちづくり刷新支援事業」に採択されるため、総合計画で新幹線開業までに整備しなければならない内容を計画書として提出し採択を受けた。

整備内容としては、昔からある赤レンガ倉庫をジオラマ館とレストラン館にリノベーションし、公共施設として整備を行った。駅前には立体駐車場を整備し、商店街エリアの 700m 程の一桁国道の両脇には、荷捌きのための駐車帯を整備され、市民が駐車場としても利用できる。ほかには、徒歩移動の方のための、駅から金ヶ崎エリア(港)までの観光用案内看板の整備や、シェアサイクルの整備等を新幹線開業前に前倒しで行われた。総事業費は約 25 億 8 千万円で、国からの 2 分の 1 の補助と基金や地方債等を充当し、一般財源からは 2 千万円程の支出で完了した。

また、駅前の敦賀市知育・啓発施設の「ちえなみき」は、民間が建てる事業スキームで行われ、内装工事と運営管理を別の民間企業に指定管理者として運営管理を委託されている。敦賀市は建屋の一角をテナントとして借りてテナント料と指定管理費を支払っている形で、土地の定期借地は 30 年の契約である。

ソフト面では、「新幹線敦賀開業まちづくり推進会議」を結成し、会長に市商工会議所副会頭、副会長に観光協会会長と敦賀市副市長、構成委員には敦賀市民間企業を中心に関係機関を集めて、新幹線開業に向けた官民共同組織を立ち上げた。

市役所がイベントを開催しようとする、1つの会場で1つのテーマでしかできない。1つのエリアだけ賑わっても、全体での賑わいを創出しないといけないと考え、イベントを行いたいという方々に、同日に一緒に開催しないかと協議し、新幹線開業の1年前の3月に一緒に各地でイベントを開催する団体を現在6団体結成して、まちを盛り上げる状況になっている。イベントの内容は自由で、開催する方々が楽しんで貰える形で行い、最終的には新幹線開業後にもつながっていくと考えている。

令和6年3月から敦賀駅は北陸新幹線の終着駅となるが、新幹線がお客さんを運んで来るのではないという言葉があり、あくまでも新幹線は交通手段の1つであり、敦賀市にお客さんが来る理由をつくり、目的地化を図っている。

◇ 観光振興対策について

「新幹線敦賀開業を契機とした官民一体でのまちづくり」をコンセプトに、賑わいを楽しみながらの回遊を目指す、敦賀市の「まちづくり」として観光に来た方に回遊してもらうため、大きく3つのエリアに分けて観光客の誘致を図る。

1. 駅周辺エリア JR敦賀駅西地区整備(ちえなみき、宿泊施設、飲食店、公園、広場)による誘客。
2. 商店街エリア 国道8号道路空間でのイベント、商店街・民間による取り組み、プレイヤー育成による誘客。
3. 金ヶ崎エリア ムゼウム、赤レンガ倉庫、オーベルジュ(民間と建設協議中)による誘客。

駅から各地域への二次交通として、令和2年からシェアサイクルを運用開始し、サイクルポートは駅に隣接する立体駐車場を含む、観光客及び市民が活用しやすい場所、11か所に設置している。料金は1時間220円で30分超えるごとに110円、乗り放題となる月額会員は1,650円で、ドコモ・バイクシェアが提供するシステムを活用している。

また、「ぐるっと敦賀周遊バス」が平成18年10月から運行開始され、運行ルートは観光ルート(平日7便、土日祝日13便)とショッピングルート(毎日13便)の2つのルートに分かれていて、観光ルートは駅からの発車時間が、平日は基本的に60分毎、土日祝日30分毎で回遊し、ショッピングルートは市民利用のコミュニティバスとして運行している。乗車運賃は両コースとも、乗車一回200円で一日乗り放題は500円である。バスの運営に関しては、地元の観光バス会社に補助金を交付し運行している。

【委員会の意見】

敦賀市では、令和6年3月の新幹線開業に向け、ハード事業は国の補助金等を活用して官民一体での整備を完了されていた。特に知育・啓発施設の「ちえなみき」の整備は、定期借地30年の契約で借地料に下限と上限を設定し、その範囲内で貸出し、知育・啓発施設の整備を民間の自由な発想に任せるというやり方で、市が極力整備費を抑える手法で行われていた。

施設自体は書店で、読書スペースにカフェと多目的に利用できるセミナースペースを設け、幅広い年齢層で利用され、落ち着ける素晴らしい施設であった。委員会として、このような施設を嬉野温泉駅周辺に今後、官民一体で整備ができればと感じた。

また、二次交通に関して、周遊バスの観光ルートは市内11か所の停留所を周遊しており、観光地には必要不可欠な事業である。本市においても早急に検討しなければならない事業と考える。

敦賀市においては、ハード事業が完了し開業に向けて敦賀を盛り上げ、敦賀の魅力を発信する「敦賀をひろげるプロジェクト」に、まちづくりに想いを持つ20代から80代までの多様な方々28人が参加し、アイデアを検討し企画実行に向けて取り組まれている。民間での取組ではあるが、火付け役や企画実行の補助金等は行政が賄い官民一体で頑張られている。本市としても今後、官民一体でまちを盛り上げるための魅力発信や、観光庁から認可を受けた「嬉野版DMO」が幅広く展開されることを強く望む。